

偏義語考

——複合語「多少」を中心に——

玉 村 文 郎

一 序

中国の市場では顧客の「多少銭？」ということばが頻繁に飛び交う。「いくら（です）か」という意味である。中国語を耳にするとさも常に漢字を想い浮かべる習慣があるので、その度に唐の杜牧の「春望」の結句「多少樓臺烟雨中」や孟浩然的「春暁」の結句「花落知多少」の「多少」がわが脳裡を去来することになる。

この「多少」は勿論「多」と「少」とで構成された複合語である。二つの語彙成分「多」と「少」は相互に反義関係を形成する語であるが、両語がこのように並列的に結合することによって、並列反義複合語を形成しているのである。この複合語「多少」は、中国語においてすでに

A 多いと少ない。多寡。

〔両義包含並列〕

B 多い。たくさん。おびただしい。〔前項偏義〕
 C 少ない。少し。〔後項偏義〕
 D いくばく。どれほど。〔一義選択〕
 などの語義を有していて、多義化していたことが辞典等の記述により確認できる。

小論は、主として漢語「多少」を対象にしつつ、このような複合語の語義の変動を調べ、複合語における成分の記号値について考察することを目的とする。

一 近世までの「多少」の用例と語義

前章において挙げた「多少」は、わが国ではどのように用いられているであろうか。先ず近世までの用例について概観しよう。

近世までの代表例

1 多少交情見一言(菅家文章 卷第二十一一〇)

2 我情多少與誰談(同 卷第四一二五一)

3 便留多少附公文(同 卷第四一二六四)

4 多少春情誰爲惜(同 卷第五一三四四)

5 竹葉攀多少(同 卷第五一四〇五)

6 文章多少被人抄(同 卷第五一四二一)

7 艶陽多少莫空移(同 卷第六一四三〇)

8 佛ノ宣ハ、^ハ「此事、願フ事无^カ。女人^ニ：譬^バ、人ノ家^ニ多少^ノ男子^ヲ生^{ゼル}此^レ以^テ家^ノ榮^{トス}。……」(今昔物語集 卷一第十九)

9 主司答^テ云^ク「善^ヲ惡^ヲ皆録^{セリ}。但^シ、善惡^ノ多少^ヲ計^ル、若^シ、善多^ク罪少^バ先^ヅ福^ヲ可^ク受^シ、罪多^ク善少^バ先^ヅ罪^ヲ可^ク受^シ。…」

(同 卷九第廿八)

10 然^{レバ}、乞食^ヲ見^テハ、喜^マ多少^ヲ不^ズ嫌^ズ、怠^テ物^ヲ可^ク施^シ。(同 卷二十第廿六)

11 和尚この山に住してよりこのかた多少時也。(正法眼蔵)

12 但かけあひのいくさは勢の多少による事也。(平家物語 卷第七 願書)

13 向ノ明神ヲ南ヘ打過サセ給^ハントスル處ニ、物集女ノ前西ノ

岡ニ當^テ、馬煙夥シク立^テ、勢ノ多少ハ未^ダ見^レ、旗ニ三十流翻

テ、小松原ヨリ懸出タリ。(太平記 卷第二十九)

14 四氣おりおり、日夜・朝暮貴賤、群集の他^ゴ少、広座・小座の

当気によりて、…(拾玉得花)

15 ある時、またシャントエソポに「風呂に行いて人の多少を見て来い」とやられるば、…(キリシタン版エソポのハプラス416

張)

16 Taxó. タシヨウ (多少) Yonoi, suunai. (多い, 少ない) 多

いものと少ないものと、あるいは、多数と少数と。(邦訳口語

辞書)

右に挙げた十世紀初頭の『菅家文章』から十七世紀初頭の『日葡辞書』までの十六例を検するに、当然のことながら前記語義Aの例と考えられるものが多く、語義BCDの例と考えられるものは相対的に少ない。

語義Aに属する例 9 11 12 13 14 15 16

語義Bに属する例 1 8

語義Cに属する例 3 6 7

語義Dに属する例 2 4 5 10

近世までの用例の約半数がAの語義として、残りがBCDの語義として用いられていると考えられる。このうち語義CとDに属する

とした例については、次のような判断を行った。すなわち、前記用例のうち一見したところ「いくらか」「いくらかは」と解される場合、それが不定数や不定量を指しているかと判断される例はDに属するとしたが、純粹な不定の指示ではなく「少し」「少しは」を含意すると判断される例はCに属するとした。語義Cに属する三例が悉く『菅家文章』の使用例であるという事実は注目すべきことであるかも知れない。いずれにしても、近世までの「多少」はまだこの語の本来的な語義Aとして用いられることが多かったと考えてよいであらう。

三 近代における「多少」の用例と語義

近代における代表例

- 17 TASHO, タセウ, 多少, (Ōi, szukunai), Many or few. — 三
kakarawazi, no matter whether many or few. (和英語林集成
初版)

- 18 預め之を計て其多少を知る可し。(文明論之概略)
19 僕これまで多少人情を解して居るから、君の心中を察する。
註。(当世書生氣質)
20 多少の艱苦は…(浮雲)
21 たせう(名) 多少 多キト少キト。(言海)

- 22 たせう(副) 多少 幾何カ。イクラカ。(言海)
23 たせう第二シヨ 合(…)名。(多少) 漢語。多寡。
(日本大辭書)
24 たせう(…) (全平) 副。(…) 漢語。イクラカ。(日本
大辭書)
25 たせう ナ。多少。おほきとすくなきと。(日本大辭
林)
26 散士が多少心血の濺ぎし所(佳人之奇遇)
27 ……多少に立腹するのみか、時としては讐を報いんとする者
あるべし。(福翁百話)
28 吾輩は新年来多少有名になつたので(吾輩は猫である)
29 待遇の事も多少はどうかなるだろうと(坊つちゃん)
30 多少の嫌もある芸人付合をしなくても、(半日)
31 わづか「纒」(副) (少しばかり) ……細少……僅少……多少
……(日本類語大辭典)
32 此引越にも多少の面倒が付き纏つた。(雁)
33 錢の多少には關せない。(高瀬舟)
34 津田は多少の好奇心をもつて、それを待ち受けた。(明暗)
35 尤も多少細かい所は間違っているかも知れません。(河童)
36 問 君の交友の多少は如何? (河童)

37 多少の凶々しさを装えるようになっていたのです。(人間失格)

近代における「多少」の用例を吟味すると、17から37までの二十一例から知れる如く、分布上著しい差が見られはするが、A B C Dの四語義のすべての例が存する。

語義 A に属する例 17 18 21 23 25 33 36

語義 B に属する例 27

語義 C に属する例 19 20 26 28 29 30 31 32 34 35 37

語義 D に属する例 22 24

用例の17 21 23 25はいずれも辞書の記載例であるが、そろって語義Aの例となる。なお、22と24はともに語義Dに相当する副詞を別項として独立の見出しとしたものである。残り十五例のうち、18 33 36の三例が辞書以外の語義Aの例で、27が語義Bの唯一の例となる。

残余の十一例はすべて語義Cの例と考えられる。前章においてすでに言及したところであるが、Cと解されるものは個々の文脈においてはDとも解しえるものが多い。例えば、19の「多少人情を解して居る」の「多少」は、元来「いくらか(は)」であつたものが「少し(は)」という意味に変じたと考えられるのである。³⁾

ところで、このような語義Cの例とされるものは、近代の用例としては前記の十一例に限られるのではなく枚挙にいとまがないほ

どである。例えば『吾輩は猫である』の十九例、『明暗』の三十二例、『青年』の七例、『キタ・セクスアリス』の五例、『澁江抽齋』の七例、『人間失格』の六例のすべてが語義Cの用例であり、『河童』の八例中の七例もまたCに属する。その他の作品の例も前記33及び36を除くと、同じくCに分類されるものである。

以上の調査は無論悉皆調査ではないので、断定はさしひかえるべきであるが、近代におけるこのような傾向は確かに近世までの状況とは著しく趣を異にするものである。『和英語林集成 初版』は「多少」に関しては『日葡辞書』の記述を襲つたものであるが、『言海』と『日本大辞書』は前述の如く副詞としての「多少」を立項している、近代辞書としての分析的な編輯を進めている。この点、現代の辞書の大半が副詞用法を別項としないのとは対照的である。ところで、『言海』や『日本大辞書』が語義Cを挙げなかったのはなぜであろうか。副詞「イクラカ」の語義にCの語義が含まれているのか、はたまたCの語義が当時まだ積極的に意識せられる状況ではなかったのか不明である。後者であるとすれば、少なくとも明治前期の作品の例については再考が求められることになる。ただ、辞書の場合、執筆・編輯・出版という段階を経過するために、一般の文章とは異なり、五乃至十年の旧態を反映するものであること、さらに龜鑑としての規範性に拘束されて新語・新義・新用法の載録に

消極的になる傾向があることの二点を承知しておく必要がある。ここで注意すべきは「和英語林集成 第三版」(一八八六年刊)が、初版の記載事項に追加して、「*so da* : *ni yorazu*」と記していることである。第三版に追記された二項のうち、前項の方は明らかに「多少」が副詞化しているという判断の根拠になしえるものであろう。ここに、副詞化への過程を考えるならば、名詞「多少」は先ず第一段階として「多少なりとも」の如き副詞句を構成し、第二段階としてこれが「多少とも」に凝縮されたと考えられる。「多少なりとも」や「多少とも」に含まれる「多少」は、論理的にも実質的にも消極的な「少」のみを指す結果になっている。こうした副詞句中の「多少」の語義は、もはや語義Dの「幾何か・若干」とは距離を生じてしまっていることが認められる。さらに「多少なりとも」「多少とも」という句が簡略化されて単なる「多少」という形だけで、副詞句と等価的に用いられるようになり、単独で述語にかかる副用語に転じたのが第三段階である。つまりこの変化は、

「多少なりとも」↓「多少とも」↓「多少」

という形態の変化に対応していると考えてよいであろう。「多少」は右の第三段階の副詞化した「多少」の語義を限定するために助詞「は」を伴った形として定着したものと見られる。用例31は一九〇九(明治42)年に刊行された『日本類語大辞典』の記述である。見

出し語「わづか」(副)の語義注に(少しばかり)とあり、類語群の中に「多少」が挙げられていて、明治末年には「多少」がひろく語義Cとして用いられていたことの証左となる。前記の辞書以外の用例の語義について、Cと判断したのは以上の理由による。

語義Aに属する18336の三例は、「○○ノ多少」に続く句が「ヲ知ル」「ニ関スル」「ハ如何」などであり、「多少」を受けるものが通例格助詞であるから、形式上も名詞であることが明白であるが、近代の用例の分布はこの語が多かれ少なかれ硬い漢文訓読風の部分において用いられるものであることを示していて、原姿・本義のもつ漢語としての位相を濃厚に反映していることに注意する必要がある。

一方、語義Cに属する用例は、「多少ノ十名詞」が最も多く、「多少十形容詞・形容動詞」や「多少…十格助詞十動詞(アル・解スルなど)」は相対的に少ない。

四 偏義語の条件とその性質

『中国语言学大辞典』⁵⁾は「偏义复词」(旧称「偏义对举字」)という項目を挙げ、「两个相反、相对或相近、相关词素组成、只取其中一个词素义作为词义的复合词。」と説明している。二個の反義、または対義、または類義の相関形態素によって形成された複合語で、成分の中のただ一個の形態素の意味だけで語義が成り立っている複

合語である。同辞典は「缓急」(义偏急)、「窗户」(义偏窗)などの語例を挙げてゐる。前章までにおいて考察してきた「多少」はこの辞典のいう偏義複合語の一つに数えられるものである。

任学良著『汉语造词法』^⑥はこのような偏義語を次のように品詞別にして挙げてゐる。(傍圈点は虚義化した成分を示す)

〔名詞〕 兄弟。国家。人物。窗户。质量。狐狸。舟楫。恩怨。

〔動詞〕 忘词。死活。离合。

〔形容詞〕 甘苦。好歹。是非。缓急。悲欢。

〔副詞〕 好不。

同書はさらに次のような説明を加えている。

この類の並列構造は、二個の成分(反義成分が多くを占める)の並列によって一個の成分の語義を消失せしめ、いわゆる「偏義詞」を造っている。上例すべてがこの例である。語義を消失した方の成分は、ただ引き立て作用を有するだけである。しかし語によつてはこの引き立て作用をもつ随伴成分を切り離すことはできない。例えば、「缓急」では「缓」がなければ容易には「急」の語義を際立たせることはできず、やはりこの引き立て成分が必須と見られるのである。ここに注意すべきは、語によつてはその語義が複雑で、結合形式はただ一つにはとまらなないことである。例えば、「是非」は二種の構造をもつていて、その一つは

反義並列で、他の一つは偏義語である。また、「好歹」も二種の構造を有して、反義並列と偏義語の二者である。このように見てくると、語義は複雑なもので、語構造もそれに応じて複雑なものである。一語多義があり、また一語多構造もあつて、簡単に処理することはできない。

ここで「偏義語」について定義を与えることにしよう。『中国語言学大辞典』の説明を整理すると、次の三点が条件となる。

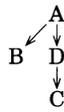
- (1) 二個の形態素の結合による複合語であること
- (2) 成分である形態素の語義的な関係が反義・対義・類義のいずれかであること
- (3) 成分のうちの一個の形態素のみで複合語の語義が成り立っていること

『汉语造词法』は、これに加えて、
(4) 並列構造であること

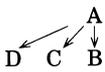
を挙げている。以上の四点の条件を充たすものが狭義の「偏義語」ということになる。『汉语造词法』は先に紹介したように、「偏義語」について柔軟な捉え方を示している。まず第一に虚義化した成分を不要部分とするのでなく、語義の引き立て役としての機能を認めていること、第二に「偏義語」を生み出す構造が単純でないことを述べていること、第三に同一の複合形式が二種以上の内部構造を

有しえることを指摘していることなどからわかるように、態度に慎重さが認められる。小論が論じてきた「多少」は、『汉语造詞法』の挙げた中国語の「是非」や「好歹」に関する説明がそのまま適用できる複合語である。

右のような並列反義複合語は、語彙成分である甲と乙との結合によって、原義とも言うべき両義包含並列の「甲ト乙(ト)」という語義(A)のほかに、一義選択の「甲カ乙(カ)」という語義(D)、前項偏義の「甲」という語義(B)、後項偏義の「乙」という語義(C)などに分化したわけであるが、「多少」はそのすべての語義を有する点特徴的である。複合語「多少」のみを観察するときは、並列義の生きている中立的なADと一義に偏したBCについて、



のような語義の推移の過程が考えられる。しかし、偏義語一般を観察するときは、



の如く、それぞれ別個に推移したと考えるのが妥当であろう。

ところで、和語の方で反義または対義または類義の並列複合語は

どういふ状況にあるだろうか。

名詞 やまかわ ちはは おやこ つみとが めおと(ミョウト) あさゆう つきひ うらおもて てあし くさき
おひれ いえやしき えだは

動詞 ゆきき やりとり あげざげ でいり いきしに のみく
い うりかい はやりすたり かちまけ きれつづき だ
しいれ たちい

形容詞 たかひく よしあし しろくろ
その他 ありなし ずいらず

以上はその一部であるが、漢語に比べると明らかに少ないことがわかる。以上の和語の中に、漢語「国家」や「多少」のように偏義化した例を見出すことはできない。ただ語彙成分の単純な和とは言えない語義をもつに至った例をいくつか指摘しえるだけである。例えば、「時間」を指す「つきひ」や「植物」を指す「くさき」などである。漢語の「高低」「大小」「広狭」「深淺」「長短」「強弱」は、むしろ和語の「高さ」「大きさ」「広さ」「深さ」「長さ」「強さ」のような形容詞転成名詞が対応するが、両群は語義の中立性においても、造語力の生産性においても共通点をもっていると言える。語義Bの場合は、「高み」「深み」などの積極性指示の名詞が符合するかと考えられるが、制約が大きく語数に限りがある。語義C及びD

については、和語の中に類似の形式や機能を見出すことは容易でない。
い。

要約すると、「甲十二」という並列複合の形式で、語義がBCDに推移した和語の例は発見しにくいということである。

五 偏義語の発生とその種類

中国の研究書において「偏义词」とされるものは、以上に挙げたもの以外にも「妻子」「君子」「子弟」「父兄」「動靜」などがある。一見して、成分としては名詞が多く、また複合語としても名詞が多いことがわかる。だが、これらの総数は二十をわずかに出るのみで、極端に少ないことも事実である。

ところで、「国家」「人物」「窗户」などは、現代中国語ではそれぞれ「国」「人」「窓」以外の語義をもたない単義語であって、「缓急」「多少」「妻子」などが複数の語義をもつ多義語であるのとは対照的である。前者は、語義BまたはCのみを有し、少なくとも今日では語義Aをもたない。成分としては「甲ト乙(ト)」であって、語義的には偏義であって、並列構造ではない。これに対して、後者は、形態どおり語義としても本来Aであって、Aとしての用法の多様化に伴って、語義B・C・Dが発生し偏義語が生まれたものであって、本来の語義Aと転義または派生義であるA以外とが共存して

いる点に特徴がある。二十数例の大半がこの後者に属するのは、発生の経緯を考えると至極自然なこととして受け入れられるであろう。

第四章において考察した如く、並列複合語の語義は、本来その成分の語義の和によって規定されるものであるから、原理的にはすべての偏義語は、本来中立性の、偏義ならざる語義Aを有していたはずであるが、中にこれを欠くものがあるのは、通時的变化の過程で語義Aが見えにくくなってしまったものと考えるべきであろう。複合語「国家」は現在「家」が虚義化してもっぱら「国」に偏しているると共時的には捉えられるのであるが、もともと成分「家」に「都城。また、国」⁸⁾あるいは「卿大夫(貴族の官人)の領地」⁹⁾という字義があったから、複合語「国家」は元來類義または対義の並列構造の語であったわけである。

中国語学の研究書において、「偏义词」とするもののうち、前記「国家」などの類と「缓急」などの類とは、現代ではもっぱらの偏義語であるか否かという点で同一視できない面がある。そこで「国家」などの類を「絶対偏義語」、¹⁰⁾「缓急」などの類を「相対偏義語」と称して区別するのがよいであろう。

小論において論じてきた「多少」はもちろん相対偏義語に分類されるものであって、語義AのほかにはBCDを有している、もつとも

典型的な偏義語である。通時的に観察すると「多少」は日本語の中で、AからDを経てCに用法の中心が推移してきたことが明らかである。

六 結

小論では主に「多少」の語義・用法の変遷を追究しつつ、「偏義語」について考察した。言語記号の値という観点からは、虚義化または陪襯化はもつと広く解釈されるべきことも知れない。和語の中には「くもる」「つくよ」のような複合語があり、混種語の中には「面倒だ」「邪魔だ」に対する「面倒くさい」「邪魔くさい」のような派生語がある。また「はたおりべ」に由来する「はっとり」の表記形である「服部」では、漢字「部」が虚義化していて、いずれも記号値としてはゼロになっている。これらは「偏義語(字)」と呼ぶにはあまりにも個別的で偶発的な例であるが、偏義を広く解するときは考察の射程に入れるべきものであろう。

なお、ここに「大言海」「新明解国語辞典」などに立項されている「帯説」に触れておこう。「大言海」の「帯説」^⑩の項には、「輦」「緩急」「國家」などの語における輦・緩・家などのこととの説明があり、ヨ・キフ・コクの音の多きに因りてこれらの字を附すとあり、帯説の発生あるいは機能についても説明している。「帯説」

なる術語の典拠出所は不明であるが、この記載内容から「附帯せられたる説明」という趣旨かとも考えられる。「大言海」などのいう「帯説」は虚義化した陪襯成分を指しており、上に論じてきた「偏義語」そのものではなく、偏義語に偏義性を付与する、記号値を失った成分を指しているのである。

偏義語が漢語の中に存在し、その偏義語の存在が中国語学者によって指摘されていることは、偶然のことではないように思われる。中国語(＝漢語)の語形の短小性と、並列構造の複合法の生産性^⑪とが、二項成分から成る大量の複合語を産出し、また語形の短小性が陪襯(引き立て)成分を自然に求める傾向を有していることが条件になっていると考えられる。さらに形態素個々が単漢字によって規則的に文字化されていることが、虚義化の事実についても研究者の発見や認識を促しやすかったことが指摘できるであろう。

和語と外来語の世界に狭義の「偏義語」の見当たらないのは、漢語の造語成分や造語法・表記システムとの相違によると思われるのである。

注

- ① 罗竹凤主编「汉语大词典」(汉语大词典出版社 一九八九年 上海)には「多少」に、①指数量的大小。②犹多、許多。③犹少、少許。④几何、若干。など七項目の語義を挙げている。

② 用例の語義の決定については『日本国語大辞典』その他の辞書、および『日本古典文学大系』の頭注等を参照した。

③ 現代語の辞書には「多少」の語義を名詞と副詞に分け、後者に「いくらか。少し、少々。」の如く記述するものが多い。『広辞苑』『新潮国語辞典』『新撰国語辞典』『譚談社国語辞典』『学研国語大辞典』『大辞林』『例解新国語辞典』『福武国語辞典』などである。『三省堂国語辞典』は「二(副) ちよっと。」と記し、『詳解国語辞典』は「二(副) それほど多くはないが少しはあるさま。いくらか。」と記し、『新明解国語辞典』は「二(副) いくらか。〔文脈によって〕「少し」の意味にも「かなり」の意味にも使われる」と記している。

④ 『新撰国語辞典』は「一(名) ②〔文章語〕〔漢文で〕多いこと。」と記し、語義Bについてはあるが、「多少」の位相に関する注記を施して注目される。

⑤ 中国语言学大辞典編纂委員会 江西教育出版社 一九八九年 南昌。

⑥ 中国社会科学出版社 一九八一年 北京。

⑦ このような多義語の中には声調を分化させているものが少なくない。

⑧ 『広漢和辞典』等による。

⑨ 『学研漢和辞典』『字義字訓辞典』(角川小辞典4)等による。

⑩ 『大言海』には次の如く記されている。

たいせつ(名)〔帶説〕 讓ルコトヲ與奪、急ナルコトヲ緩急、國ノコトヲ國家ト云ヒテ、其奪、緩、家ナドノコト。コレハよト云ヒ、さふト云ヒ、こくト云フ音ノ多キニ因リテ、與奪ノ與、緩急ノ急、國家ノ國ト云フ意ナルナリ。(かね、金山。六、みち、徑路。くさ、草子。ほぶき、補助。つま、妻子。ほらんぐ、虎狼ノ類) 宇津保物語、俊蔭^{四十一}「岩木ノ皮ヲ着モノトシ」易經、繫辭、上篇「潤レ之以ニ風雨ニ(コノ岩、風も帶説ナリ)

なお、『大言海』に「帶説」の項のあることは、京都大学人文科学研究所の森賀一恵さんのご教示による。

⑪ 英語の *pus* は元来ラテン語の屈折語尾であって、もとは「公共」の意味した *omnis* という語の一部である。この *omnis* は自体が修飾すべき名詞「馬車・くるま」が省略されたあと、名詞の語義を吸収してしまつて「公共の乗物」を意味するようになったものである。

pus は日本語の格助詞「ノ」に相当するようになったものである。また「桃」を意味する *pech* はもと「ベルシアの」を意味したラテン語の *persica* に由来する語で、この語のあとに存在した *ponum* (リンゴ、原義は果実) が省略されて、ひとり歩きをするようになったものである。「ベルシアのリンゴ」↓「ベルシアの」↓「桃」という推移をしている。このような語形と語義にわたる変化を経て、結果として偏義的になっている例が存在するが、漢語の偏義語の条件を充たす語例はないようである。虚義化した形態素をとどめていない点で、性質を異にするわけである。